

### 第三部「先達に学ぶ」序文

#### Foreword to “the Learning from Predecessors”

加藤 雅俊\*

第三部「先達に学ぶ」では、戦後日本の学術界を牽引してきた先達に、自身の研究の背景・文脈や問題意識、研究成果に対する自己評価、現在の学問状況への認識、そして次世代への期待などを伺い、質疑応答を通じて深めていく。言い換えれば、この企画は、聞き取り調査を通じて、先達がどのような社会的・学術的課題に対して、どのような問題意識のもと、どのようなアプローチ・研究手法を採用し、真摯に研究を進めることで、どのような研究成果を得たのか、そして、専門分化が進む学問状況に対して、どのような評価をしており、現役世代や次世代の研究者に何を期待しているのか（もしくは何を伝えたいか）を、アクセス可能な記録として残していくことを目的としている。

この企画を構想した背景には、「先達が研究者として経験し、蓄積してきたこと、そしてその背景にある研究への思いを、現役世代の研究者と共有し、次世代の研究者に継承していきたい」という問題意識がある。学術界では、「論文や著作などの成果物を見さえすれば、研究者の業績は十分に理解できる」という考えが一般的と思われる。そのような立場を否定するつもりはない。その一方で、その研究者が直面した社会的文脈や学術的背景、研究者自身の問題意識などが分かれば、成果物に関する理解がより深まることは間違いないであろう。そして、学術界を牽引してきた先達が現在の学問状況に対

\* 立命館大学産業社会学部准教授

して思うことや次世代に対して期待することなどは、傾聴に値するものである。これまで、ある研究者の「研究者としてのパーソナルヒストリー」は、師匠と弟子や先輩と後輩など、個別の親密な関係性のもとでのみ教示・伝達されてきたと思われる。しかし、このような継承の仕方では、その関係性の外部にある存在（例、関係の希薄な研究者や次世代の研究者など）はアクセスできないという難点があった。ここで重要な点は、先達の「研究者としての経験や蓄積、研究への思い」は学術界の共有財産であるべきであり、また後継世代は先達の到達点や思いから多くを学び、それらを発展させ、次の世代に継承していく必要があることにある。

日本の学術界では、研究者の自伝については、必ずしも多くはないが公刊されてきた（代表的な例として、ミネルヴァ書房から刊行されている「シリーズ「自伝」my life my world」）。これは、社会的文脈や学術的背景をふまえた「研究者のパーソナルヒストリー」として、貴重な資料といえる。しかし、ここには「自分語り」という形態を取るため、他者の視線が欠如してしまい、表層的・部分的な情報提供にとどまってしまうというおそれも残されていた。その一方で、アメリカをはじめとした世界の学術界では、現役世代の研究者やジャーナリストが先達にインタビュー調査を行い、その成果を発信するという試みがなされてきた（Gerardo L. Munck and Richard Snyder, 2007, *Passion, Craft, and Method in Comparative Politics*, Johns Hopkins University、ロバート・A・ダールほか（伊藤武訳）『ダール、デモクラシーを語る』岩波書店、2006年）。これらは、「研究者自身による回顧」という自伝の持つ長所に、「専門家による質疑応答を通じた深層の探求」というインタビュー調査の利点に加わっており、より大きな意義を持つ資料となっている。大学院生時代に上記の図書を読み、感銘を受けた私は、いつか日本でも同じことをしたいと思ったが、力量不足もあり、これまで着手できないでいた。人文科学研究所の運営委員になり、紀要の企画を立案できる立場になったときに思い出したのが、大学院生の時に感じた上述の問題意識である。

今回、加茂利男先生に、問題意識や企画の趣旨を伝え、協力をお願いしたところ、ご快諾いただいた。加茂利男先生（大阪市立大学名誉教授）は、大阪市立大学や立命館大学で長く教鞭を執られ、政治理論、日本政治分析、都市政治・都市研究、地方政治・地方自治論と多岐にわたる領域で研究を重ねられ、各領域において優れた業績を数多く発信されてきた。加えて、日本政治学会や地方自治学会などの理事長を務めるなど、戦後日本の政治学を牽引してきた代表的な研究者のひとりである。また、加茂先生への聞き取りにあたっては、日本の政治学の現状と日本政治に精通する新川敏光先生（法政大学教授）と徳久恭子先生（立命館大学）にご協力いただいた。加茂先生の丁寧な準備に加え、新川先生と徳久先生の鋭い質問により、加茂先生の研究の深層に触れることができたと思われる。企画にご協力いただいた加茂先生、新川先生、徳久先生に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

企画責任者として、この「先達に学ぶ」が、現役世代や次世代の研究者にとって、有意義なものであることを期待したい。そして、この企画を端緒として、「先達の経験と蓄積、その背景にある研究への思い、社会的文脈や学術的背景」をアクセス可能な記録として残していくことの学術的・社会的重要性が認識され、実際に広く蓄積されていくことを期待したい。なお、人文科学研究所の企画としても継続していきたいと考えている。

